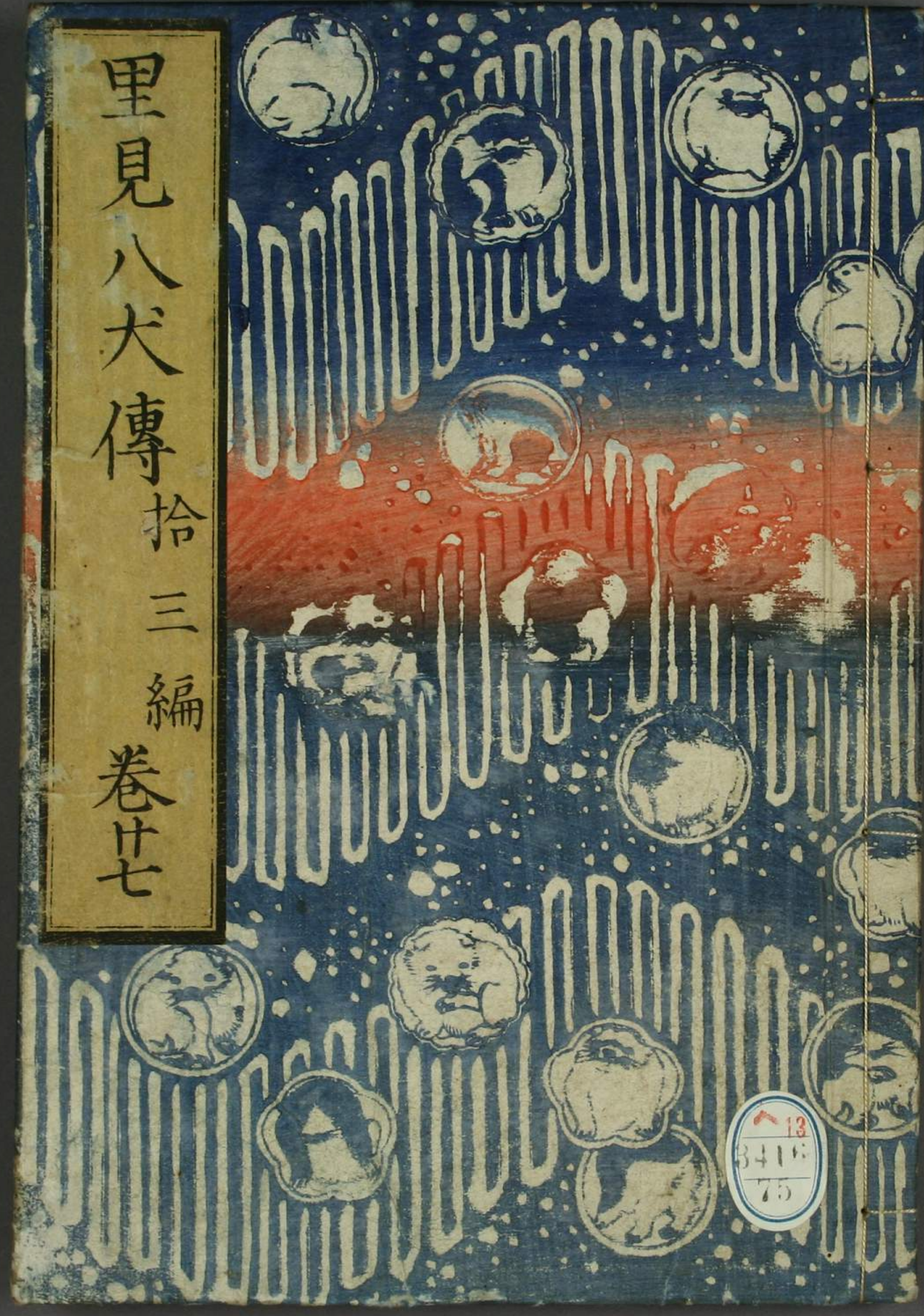




里見八犬傳 拾三編 卷廿七



13
416
75

十三編 子光一角

亦七

秋野

勝長院

南總里見八犬傳第九輯卷之二十七

東都

曲亭主人編次

第四百十二回

西滅を証て辰巳証簡を貽ま
故事を尋て政元名畫を疑ふ

却説巽於兔子の當晚絶て久自侶宿をさる枕と枕の並頭の蓮花は優るく横の
袖比目の鳥の翅ふも異るま我一句彼一句相譚以曉を愉々快々巫山の雲ハ溺愛の
岫より起る夢を載せ楚臺の雨ハ恋憐の意を打てる人知る蛺蝶花の戯とく
屢露を貪れもる不飽を蜻蛉水の尾を濡して枯枕を置ても奥安を盡ん心湯け魂
浮る温柔の卿合歡の花醜態癡情送不禁せまの曉天の稍疲勞を初て睡不就
あふいふ不て天の明るを知らむ日の高きと三竿許外で晝飯炊ぐ時候夫婦驚
覚俱不起出巽ハ速く戸を開き火を打て茶を煮る程於兔子の湯を汲み漱き

顔を拭ひ手脚を洗ひ。鍊醬を添て梳髪を熱脂白粉の故きを温めて新うまると。三十二
婦人の化粧生平より意を用ひ。身装約一晌有餘やうを造る。東折酒肆の小厮
味噌醬油の所要を悉く来ひ。是於兔子の異小商量り。先山幸の裁判の歡ハを
いんとて。昨宵樵六遣一措る。那漆罇を遣て是は美酒二三杯と腐る。擇鶏卵三
十を苞ひて。と来よ。伴の小厮の吩咐。小厮のあつて得走らうと程。もあつて三種
引提て。来よ。来よ。於兔子。是は小厮の齋。樵六許赴き。小樵六宿醒の聊恙
あり。はれ。分を休む。宿所。在。當下。於兔子。樵六其酒舖を復一饋つて。昨日夫婦
口舌の折撮合。是より。風波。風く理。事の歡ハを。演る。樵六聞あむ。その
歡ハ。然る。と。然る。罇酒菜。復さる。熟親。の。介意。昨日。既。ひ。け。う。
年中画額の下地を送る。咱ぞ。花主の身達。る。那許の酒費。より。報。せ。ら
る。中。う。ん。や。固辭。を。於。兔子。の。推。禁。め。て。否。よ。奴。今。来。ら。う。の。折。の。歡。ハ。を。さ。ら

る。わ。め。か。身。の。憑。ん。と。思。ふ。ま。あ。も。の。を。な。り。叱。り。受。ま。い。ね。い。と。と。薦。さ。樵六
才の點頭。其意も既。精。う。そ。那。頑。童。の。更。さ。る。昨。宵。も。長。き。示。る。如。く。其
義。の。胸。安。れ。意。の。這。来。由。の。山。院。然。る。美。麗。き。行。童。の。甲。も。見。き。も。見。う。と
云。尊。必。高。き。今。是。聞。く。ま。り。い。ん。必。是。老。る。狐。妖。裡。の。主。を。弄。ぶ。生。愛。化。の。疑
る。咱。等。山。入。て。木。を。伐。る。折。動。ま。れ。山。鬼。の。爲。の。嚇。さ。る。と。間。に。ま。り。登。時。准。備
火。銃。を。も。く。其。方。推。向。て。空。丸。を。放。ち。う。ち。獲。へ。其。妖。怪。立。地。の。退。き。去。ら。ま。い。を
る。あの故。我。猶。夫。の。あ。ら。ね。ども。年。来。這。鳥。皆。銃。一。挺。で。貯。持。り。明。日。より。七。山
拵。で。果。し。七。か。り。来。て。那。妖。物。の。来。り。を。等。て。必。よ。狙。撃。て。其。本。體。を。見。ま。す。
異。妻。惑。ひ。覚。て。い。う。か。ん。身。の。胸。安。ら。む。咱。等。の。任。め。の。捕。ま。り。説。話。を
於。免。子。の。急。な。推。禁。め。て。開。き。勇。ま。さ。る。尚。那。頑。童。の。変。化。を。真。の。少。年。を。え。ん。ぬ
人。を。害。す。罪。重。り。と。思。ふ。の。後。悔。を。ま。い。の。ふ。七。及。ぶ。を。殆。ど。所。行。で。け。り。と。詰。ま。り

樵六冷笑ひて然るの遠慮するや聞ふ頑童が宿所交加来ぬ又朝きて又
 晝るまで日景傾く下晡の時候なりとこれなりと思ふ地狗天狗陰物に目見憚
 つも夜を宗宗是其真の人なりぬ明證と做す不足する者なり況や我這晴も相相
 るふ及びて他へ変化欲真の行童欲しふと諺つてその美も心安りふと解
 して於兔子の歡ひ信て然るも身任して明日より七山様を疾果来て埋
 伏せしらえん更を願ひけし奴が先の見出さば走来て疾も身報人時を違へ
 るふと謀し合多告別て於兔子の宿所へ還りけり然る異に這計較を告り且
 言ふべし一直も料り知る言ふらまけしども於兔子樵六との西魔王の佛心を打
 破らして年来修せし善行と平暗の澳へ放下さしり神の祐も戒之疑ふ故
 畏れせられた似る鳥と俗中云於兔子が日毎の薦る隨意酒を喫み餽を討り夜へ
 亦夫婦枕を雙て淫酒の樂ふ耽るる賣買の多き暮さる借財の増き増さるる

思ひなまひるる人々伴てて且是定と人々錢を借て還さる是よりの後義父九里平の思ひ
 の精進甚だ家廟の家火の要るを蔵りて加柳の足ぎを補ふる基請も薬師
 請も排斥て見へた矧又那神童の詠る虎の画額を等雨の只虚々言を過其
 自餘の画額故ら小賣畫をまで取画る然る異が住まふ不似不善の根返るも嫉妬
 徴て内を怖る本性浮薄の癖を於兔子に只那男色を防んとる思をせし是よりの後
 村長より召さる病着る假托て辭せ日毎の宿所在る疎遠十四五日及び程有百
 又村長の老成が小厨さのひさるる頃日かきて来まはれ秋も早半過て月瞻る頃ふ
 るひは綿令衣及あり央錢の望あり開左も右も七まるらせん明日の風て
 来まひぬいしや人を疎まも涯のありと怨下る口状の稜をたぬぬ於兔子に
 今又固辭の由るは他央錢の前借もあり然るも萬事差配の任する長の安養の
 憎むるも多る債の類を寛解る便宜あるもむと尋思をあらむと答りて

轉て使て返しつゝ其の美を巽の告知ら其次の朝辰牌時候より於鬼子の絲鍼の小裏を
 抱きつゝ立出て村長許赴く折先樵六の宿町の立寄で情多し告るや奴家今日ハ侍の
 情由ありて已むをば長殿許召すその日暮で還らん故にお身不憑を侍工那頑童
 奴久しうも出来ぬをいも見え奴家が在らぬを幸か引合れぬ争何せん願ふ
 ぬ身今日一日の山樵を骨休し我身代りて留守を其立舞の締まり二百銭
 まれまらせんを憑む樵六聞果を井あらぬ然りて上舞貫て何せん意の我
 怒れぬ身の宿町の神樂を居て做さる日と消き兼令疑ふ那妖物も出来好々
 我せん術あり今より情地の準備とまの宿町の頭を守ると便宜の樹蔭飲庇間炊柴
 垣の裏まご小躲れて待たるる縦地狗まれ天狗まれ目み見ぬものさうに較
 捉るも段我存在と任とぬ身長殿許疾ぬ人多くそのを於鬼子の合点大點
 頭て企む迹を左も右もぬ身任仕せん脱落ぬる去らぬと情語果も尚遺る

詞の露をかりて憑む秋の日影の朝曇早登るやと瞻仰るべも空の叢雲の脚をたも
 村長の宿町へそそのまきけるよの日巽妻の留守して早徒然の堪きまぬ銀あまされ
 酒のの喫まで朝より出て店舗小在り二旬有餘を雨を足らぬる十二生月の画
 額に此彼と画く程の秋の日れば短くて下晡のりし時候那行童忽然と来て履衣
 頭存在とよや主人我詭方虎の画額へのふやと向れて巽駭き羞て頭を掻つ陳
 ぶらう那画額の夏へも仰付らば次の日より小可風寒小冒されて昨日まで臥在り
 あぶのも遣ても中ゆぞ願ふる不又十四五日の用捨を仰きまぬのでとらち勸解を
 行童所つ恨る色も然るあむく汝夫婦の浮薄の本性我知とて侍る大事を
 課せぬあむかむ汝等猶幸の那舊悪を懺悔七新の甘まぐ欲ぬる一善既ぬ
 進むてと衆悪退く自然の天理是より彼岸の到るべん慈航遠まあむか我佛
 勅ふ因て試つて小原の罪戾深重まけ鬼神衛る國法借まを我慈悲及て冤

家と做。始の弥増罪悪。則是業果。結る鳥爵の魁。此兒の神筆。名画を取せ。疑思ふ
 矢もあらん。汝是る。此員を抱く。與他御の血を見。禍賢者を禁錮。路啓ける。福多
 申あり。巨鱗東洋。小還る。のるる。貴人散衰の世。憐ま。得が。此化員を愛る。與年來
 民の膏腹。を致する。奢後。をも。做る。二端。小做る。ま。ま。神祇の勸懲。佛陀の慈悲。天
 機を分教。なるも。若們。是。土中の骸骨。國王。願下の。餓鬼。を。今。ま。亦。何。な。知。た。
 已。ん。く。と。丸。彈。と。射。て。踵。を。旋。々。を。俛。の。り。行程。の。異。ハ。句。も。答。小。由。多。且。羞。且。畏。れ。る。
 背。の。冷。汗。を。流。ま。る。も。頭。を。低。て。黙。然。す。介。程。件。の。行。童。の。異。が。宿。所。を。立。去。つ。て。ゆ。く。い。ま。ま。
 百。歩。の。及。び。路。の。這。方。の。冬。青。樹。の。蔭。の。張。ふ。一。人。あり。是。則。別。る。が。亦。那。山。奉。樵。なる。
 寃。済。志。一。鍊。砲。の。火。蓋。を。鎖。て。挫。と。放。其。憐。び。一。件。の。行。童。の。背。を。胸。ま。撃。抜。ま。げん。
 一聲。苦。叫。び。も。果。を。身。を。仰。及。ら。し。と。什。其。の。當。下。樵。六。鍊。砲。引。提。ま。く。樹。蔭。を。立。出。て。
 死。活。の。い。と。走。寄。る。程。も。あ。ら。ま。異。も。亦。あ。る。光。景。胸。を。淡。を。吐。嗟。と。さ。り。身。を。跳。り。の。

出るの慌。一。單。底。草。履。穿。あ。る。走。つ。て。其。里。の。ゆ。り。相。る。小。敷。の。ま。一。人。那。行
 童。を。今。村。長。許。り。來。あ。け。於。鬼。子。の。胸。骨。打。碎。ま。て。鼻。より。も。口。より。も。吐。き。
 鮮。血。襟。さ。帶。さ。韓。紅。糸。線。做。る。窮。所。の。銃。傷。の。い。と。不。死。の。藥。も。届。ぬ。三。魂
 既。天。の。歸。り。六。魄。輒。地。の。隕。て。又。流。く。も。あ。ら。ま。俱。驚。く。樵。六。引。提。鍊。砲。投。棄。廢
 居。の。挫。と。膝。組。あ。る。胸。を。敲。き。聲。戰。ま。て。却。愆。殺。の。い。と。思。ひ。魔。魅。逃。去。思。ひ。の
 了。於。鬼。子。の。刀。自。我。統。頭。の。か。る。死。あ。ら。ま。又。狐。狸。の。妖。術。を。其。の。人。を。今。幻。の。目。見
 たる。狀。を。ま。る。あ。ら。ま。怪。念。過。て。及。び。差。池。失。策。面。目。も。異。主。然。と。推。量。ら。る。作
 廢。の。い。と。せん。ま。る。り。小。空。を。駭。て。披。起。ら。る。返。見。て。も。甲。斐。を。る。後。悔。越。小。達。ま。ま。バ
 呆。ま。て。一。霎。時。忙。然。る。事情。を。知。り。も。ま。た。異。宅。春。と。亡。れ。る。怨。の。堪。ぬ。胸。逼。る。
 眼。會。雲。り。齒。を。切。つ。と。握。る。拳。の。遣。方。も。ま。怒。り。不。儘。る。聲。高。き。這。奴。大。胆。妻。の
 雙。言。今。ま。何。等。の。分。説。あ。ら。ま。覺。期。を。せ。ま。罵。も。果。を。脚。を。飛。七。丁。蹴。蹴。ら。る。



鞭ぶ樵六の身行敵對甚。泥塗まを張つて脚を縮らる。春蠶を起直らんと
 志ぬ程の異は猶も怒り勝ぬ勢ひ禁むくもあきれ送る鏢砲拿るるもや
 振閃て樵六が頭を並て破と撃り拳の牙も不祥の時運樵六の百會より眉上三打破ら
 きて穴見を骨砕ける必死の深瘻の一霎時め堪ざんや仰及てを儘息の
 絶ひけり然も異の妻の冤家と立地不較東あふ事遂らふ似れども又よく思へば
 後悔あり樵六の豫より那行童を狐狸の妖怪るらと思決り見識あれ行童の
 來ぬを現て這鏢砲を以て方僅撃抜まく欲けん妖怪前知術あれ那身のぞく
 免れて折から村長許が承り來り於兔子を撃つてその怨を復らるぞあらむむむ
 差錯出るといふも樵六我宅着を然も鮮死の罪人結紐て領夫許稟さ必首を
 刎らして怨を復さ易らるれ我一朝の怒の衆七捷窮野の深瘻は他死
 照るるに我身及て疑て於兔子樵六非命の死に我野爲るんといふも何ぞと

よくの鮮んや。理を持たず。非の陥まて牢獄の繫。呵責の苦も罪多ふぬ罪の
 死ん折悔の八千度百千度。膝を噛み及ぶらる。左ても右てもあの年来幸な上
 幸ありけ。家の艱の福鬼の上も離れぬ人の蹟を継ぐと今あ危窮の事
 喪ふれあの日月の照らまふも他郷の走ら厄解けて今この夏及苦を後竟昔
 語の做ままでの幸るらる。と吐の回ひ吐の答で速く先四下を見迎ま秋の日早く
 西の沈て點燭時候より一田舎素より人稀て祖來絶れ知る者あは折を
 よけれ偷歩も。已の宿所かへ入て猛可計較む奸智の賂筒いも画の素版の額を
 引ん甘筆を添る画研の池の浅けれ深き伎倆へ更か又幾層の罪を造言思ひの隨は寫着
 て筆を捨身を起。纒の逆旅の準備し那無障子の虎の旁軸を袂の裏に背馳して立坐
 志て又思ふ我頃酷く錢の憎めて總一貫の餘財いあは衣物の皆四を被られて久く
 鮮舖の庫在り身行客あるも。明日より七宅麼何せり。長き旅宿の盤纏はせや

我冤家山幸樵六のぬる年。子を先とて妻をさへ喪ひて。單身あつた錢ある者多。毒を味
 る。磔を繰り人を殺さ血を見る。前路の駝賃の外多。那奴宿所を極探ら。六欲どりの盤
 纏ある。噫。此也。肚裏も出来。多。賊計。賊智の筆帳。既決り。一。情地。背門より走去。
 案内知る。樵六。宿所へ赴き。鎖を破ると。内へ找入。東總より。刺し。月影を燭の
 左右。小榎。大榎。衣甚。龍漏。流。撈り。討ら。思ふ。不。似。金子。二。三。分。と。永樂錢。買有
 餘あり。獨居る。れ。賊難。を。怕。れて。外。預。け。一。飲。骨。折。甲。斐。る。は。所。為。る。無。く。優。せ。と。懐
 夾。めて。又。衣。物。の。水。の。入。ら。ぬ。を。擇。登。て。大。袂。の。推。裏。と。楚。と。搭。駝。と。昔。笠。の。面。を。隠。せ。徳
 出。る。造。化。と。い。ふ。甚。盧。が。散。る。浪。速。津。を。心。當。ふ。その。通。宵。走。り。と。知。る。者。い。ま。る。り。け。り。余
 程。の。天明。て。後。の。巽。が。近。隣。の。莊。客。們。へ。於。兎。子。樵。六。の。横。死。の。亡。骸。を。見。出。し。七。檜。為。聚。の
 又。巽。が。版。額。の。寫。ある。貽。翰。を。見。出。し。事情。を。い。ふ。一。一。隨。即。村。長。の。告。知。俱。の
 領。主。の。訴。え。実。檢。使。を。請。稟。と。い。ふ。ま。の。日。実。檢。使。出。て。來。て。件。の。男。女。の。亡。骸。と

檢。出。る。於。兎。子。の。則。鏡。瘡。の。樵。六。杖。傷。と。且。巽。が。貽。簡。の。道。り。本。邸。の。樵。六。我。妻
 於。兎。子。が。姦。夫。と。その。不。軌。既。不。發。覺。る。及。び。て。男。女。謀。一。合。相。携。て。今。宵。逃。去。ら
 ま。く。欲。せ。て。己。透。さ。ま。趕。蒐。出。て。鏢。砲。を。も。て。淫。婦。於。兎。子。の。矢。場。の。較。の。倒。し。畢。し。樵。六。の
 這。勢。の。小。駭。き。怕。し。腰。打。抜。し。て。巫。巫。の。逃。る。に。ぎ。り。と。己。甚。焉。直。は。走。蒐。り。鏢。砲。を。も。て
 他。が。眉。間。を。撻。一。窮。所。の。堪。き。う。けん。か。る。枕。の。息。絶。せ。る。地。方。を。去。ら。ば。妻。敵。を。較。果。し
 去。へ。愉快。の。似。れ。と。生。拘。て。訴。き。う。け。後。悔。臍。を。噬。ども。及。び。事。の。不。祥。の。世。を。觀。れ。是。を
 菩。提。の。種。を。出。家。し。身。を。雲。水。の。儘。せ。ん。思。の。外。る。願。ふ。近。隣。の。父。老。達。去。の。美。を
 も。て。左。も。右。も。宜。く。計。ひ。ぬ。ね。一。仍。一。翰。如。件。箕。梨。屋。辰。巳。と。書。う。け。當。下。実。檢。使
 是。を。見。て。則。近。隣。の。莊。客。們。の。巽。夫。婦。と。樵。六。の。出。所。來。歷。及。年。來。の。行。狀。を。詳。し
 質。問。ふ。大。家。笠。で。巽。於。兎。子。の。箇。様。々。原。西。國。の。浮。浪。戸。の。本。村。の。繪。馬。經。紀。箕。梨
 屋。九。里。平。の。乾。見。の。做。て。その。讓。を。受。る。者。多。初。行。狀。宜。く。近。來。猛。可。改。め。り。

不怠の信者ありより。五戒を持ち常精進し。夫婦雙宿甚く三人の噂の聞えし。
 又樵六の當村根生の樵夫にて宅眷の既世を去り。今獨居の鰥夫にて年來巽が
 賣買の画額の下地を造り送り。特小親しくいとも巽と妻と情由あり。その美し知
 らばこの糸口紛れあり。七実檢使うち听て主君の聞えし。有司奉りて謝断せし。
 巽持戒の念佛者あり。その妻淫奔の罪あり。その女奴夫と推雙で轆果をくも。
 あり。良人として。其妻を殺し。忍びかたの故をありけり。惜む。樵六於鬼子死して
 巽の逐電をられ。虚実を糾考する由あり。たやく巽が往方と涉獵し。おて奉る。下
 命せらる。是より村長の莊客們を部りて巽が往方を索るもの。時後れ。これ知る由
 あり。或云件の樵六は。性奸慳にて神を敬む。亦佛を信其始。始の食かけ。夫婦
 婦好。その人の稚子を求めて養ふ。その妻より。只其養育料の銭財を食んと。その所
 行を。敢其子を憐ま。死まれ。又別人の稚子を斲金求め。養ふ。孰も一年半。其

子の死するより。一殺やまむ。人の思ふ。その餘尚の知らぬ不義の利害。食りけり。富
 生。其妻の心。食りけり。小財を食りけり。貯祿の身。一頃。樵六
 獨子の年。九。夏川。溺死。けり。七。骸を求る。三百。一。級。次
 年の春。時。樵六。妻の頭死。其身。單。けり。是。必。隱匿。報。い。ん。云。惡。評。人
 聞。不。業。報。の。是。足。り。を。あり。けん。那。身。巽。杖。殺。され。且。淫。奔。の。惡。を。あり。所。親。と。い。
 ども。是。と。怖。ま。況。て。巽。於。鬼。子。浮。薄。中。七。伴。誑。多。言。行。の。齟。齬。い。言。疑。あり。
 事。好。村。民。等。樵。六。於。鬼。子。の。七。魂。を。市。巫。の。駭。小。掛。せ。て。問。い。く。於。鬼。子。喫。醋。樵。六。
 生。慳。の。神。佛。の。眞。實。と。言。て。横。死。を。する。且。巽。妻。を。誑。已。を。飾。り。邪。智。好。惡。
 趣。まで。人。み。る。知。る。を。お。駭。怕。れ。情。地。の。後。々。見。孫。の。駭。言。を。あり。けり。是。より。不。
 る。ま。巽。の。所。在。知。れ。し。西。所。の。家。を。毀。て。家。火。の。皆。没。官。せ。れ。於。鬼。子。樵。六。七。骸。半
 馬。其。野。の。棄。られ。餓。る。狗。鴨。肥。けり。是。後。の。話。却。説。巽。其。夜。又。き。藥。師。院

村を立去る。徑路を求めて遠を埋りて只管のいそぎ。六日數僅の程にして浪速に到る客
 店小存と這津小相識のいそぎも魚米の地をれば世渡易けん我妻の神童の教小うて
 上達する画を口を鯛を思ふゆりて月額を刺し。則其姓を竹林巽風を改を
 頂髪を長くするまで權且逗留ある程の秋の果敢る暮果て冬の聲ふるめりて坐
 を食へば盤纏續るも只得行囊を解啓して嚮向の奪略して来小ける権六の衣
 裳を合出。店小二小憑きて售せて又二三両の金子をたぬ。是も盡る争何せん
 先屏風繪ると画言て此の錢の做さるる紙筆繪具を買致して得意の虎より
 画を創るまゝいふ然し。學次治りける巳が画ふる忘れりて學治りける己前より
 猶も拙さるるもあまを備我の迷ひ飲と思ひ復して又画ふる只虎のこめあまを三
 生肖の獸のささ草木山水一箇とてよくも形状を做さる者多く定小兒の塗抹ぬれ
 焦燥の画を破ると推固の擲して頭を傾けしけり又胸を鎮めて思惟る鼻裏の我

馬猛可の進で各ある筆の差さる。思ひの幻めて怪き行童が幻術して我眼を
 眩惑けん介らるる推来小ける。那無瞳子の虎の旁軸も亦金同の筆ぬらして
 然せる價直るるたの依事怪しき過る。今さう心許るる。猶素紙ぬらして
 疑心起りと安らるる獨件の旁軸を合出。情地の開きて眼を拭ひ肩を濡し壁の
 推當堅小見の又合直と横小見と実の故色の白畫を始小毫も変るる。今ハ
 是の我半生を安樂の過る本錢の外も。故書画を愛る黄白家小活らる百
 金千金の價もいづも小あらる。思ひのいづれ。逆旅主人小相譚ひ。這旁軸を
 活する昔の難波都のいづれ。今小鄙備。漁村小あられ画を好む者ありて
 誰より堅定きて玉と石を辨知する其画虎の瞳子を眼筆を思ひの縦直る。原
 小欲する者も。聞へく巽風を失ひて然る虎の眼の鳥珠を加えて買家小を
 思ひの又思復せん我那行童の做戒を守り筆を加る時這虎倘脱出て人を破らる

吹て来る後悔あらん是亦容易に枝るべし。左の右の思難いありける程
 京の骨董店の主人、祿齋屋余市と喚ばる者、生活の與ふ津の来り、昨日この
 客店に在りて、巽風の活き、欲する金圖の虎の画軸の事を聞知りて、隨即店主を介し、
 巽風の對面より請て其画軸を問ふの事、這無瞳子の虎圖、偶故老の傳聞あり、倘
 果して真筆なるに價は世の至宝なり。聞り及ばざるに、東山御所様、義隆公、茶と
 好ませぬの故、故書故画の御用毎あり、頃者も亦舊う和漢の名画の禽獸を徵
 尋するに、安んずる小可が大家の經紀なる、各々の多積みありて、種々なる名筆故画、幾幅
 飲まらるに、都て御覽を願はるる、御意は稱へて退けられ、小可の年来西陣の
 管領様、坂元小出を許され、御物の御用あり、毎必来り、今番も亦那黒御家老
 香西六人の内意あり、這頭寺の寺院の什物、古代名画あり、買ひ思ひて来り、
 るの折、まは、値連と料らば、穿中け、這一軸、東西足るべし、今又外と、借頼る

要る。主と京師伴ひかへて、我々續より、上々の意、覽を備らまは、御意の稱へ、造化
 無類の利分功、錢思の隨多、賣買を仕らん、這議甚、本と説、誇り、巽風、歡ひ、意外の
 出、取亦異議あり、詰朝、早天不起、早飯を果し、房錢を店小二に還し、ま、那病
 軸と推し、余市、其、京、小、赴き、姑且、他、宿所、居り、且、裏、那、行、童、不、解、示、さ、さ、る。
 件の金圖の画の來歴を、詳し、寫し、相添て、次の日、余市、不、述、與、奉、る、余市、則、受、合、せ、違
 る、袴、を、穿、一、を、腰、帶、て、政、元、郎、中、多、香、西、復、六、の、宿、所、造、り、人、情、厚、く、對
 面、請、ふ、件、の、名、画、を、管、領、家、の、内、覽、を、入、ら、れ、る、を、願、ひ、復、六、則、ち、画、を、傳、來、の
 主、竹、林、巽、風、は、今、那、果、在、る、を、問、ふ、余市、答、て、那、人、其、画、軸、を、活、合、せ、今、番、遠、方、を、
 來、り、て、留、り、小、可、宿、所、に、在、り、御、氣、の、善、い、に、召、俱、ま、り、易、し、か、ら、異、日、御、沙汰、を、
 ま、で、画、軸、は、且、借、れ、ら、れ、ま、余市、首、尾、は、好、思、に、連、り、額、衝、三、媚、七、宿、所、へ、退、り、
 け、不、題、京、管、領、政、元、其、裏、大、江、親、兵衛、を、家、留、り、詞、敵、の、做、り、徳、用、堅、削

ちを疎とて召させ、徳用も亦試験の不覚を取て稍久く、病病と唱て頭出とせ、あるも
 あらぬ冬、誓て會誓普一舉の時欲得と念て、案過を程の雪吹、姫の初冬の風會
 されぬひより、持病の虫積又起り、鍼灸藥餌の効ありとせ、故に給事の女房を召し、高量と
 徳用堅削兩師徒の加持を相成かち、只願請稟せ、政元亦已を命じ、隨
 御徳用堅削を召させ、讀經の用度で実行せ、行法の力を盡し、姫の病平安の切を奏
 せ、命せらる。是中、徳用堅削又出頭の折、姫の臥房の近に在り、政元、徳用が法
 壇降り、折、兩室を召し、其、那病着の輕重と法驗の遲速を問ひ、徳用詭詐の序を
 びて然、姫の御病惱の虫積のゆゑ、相思病をまじ、其法驗甲非をく、いひ、とせ
 政元訝りて、亦亦誰と想ふ、秋と問ひ、徳用然、姫の意中人、則是別合、久く
 留存在、那美少年、ゆい、言憚りある、似、他と、陪業、假、の、姫
 上、執の折、偷見、御煩、稜、の、人、要、なる、を、と、題、を、政元、聞、ま、る、と、く。

及て地談不及、徳用のいひ、思ひ、の、あ、の、後、亦、親、兵、衛、と、諧、の、專、那、談、り、て
 甘く、政元の堪、勃然とて和僧へ出家、人、似、げ、も、多、く、何、と、照、据、の、門、の、秘、事、を、こ、へ
 告、る、ら、ん、我、親、兵、衛、が、文、武、の、才、を、愛、を、と、召、近、つ、て、兩、眼、の、折、の、陪、業、を、せ、も、男、女
 雜居の甚、き、至、ら、ん、也、知、亦、那、親、兵、衛、の、少、年、を、れ、ど、禮、儀、の、武、志、我、を、意、を、介、の、を、
 病者の姫、の、い、ふ、と、偷、見、て、他、を、想、ふ、き、倘、実、其、其、支、あ、ら、ば、我、親、兵、衛、と、女、婿、小、と、所、領、の
 國郡を分取せん、と、素、より、望、む、所、漫、の、の、を、い、ふ、と、若、ら、れ、徳、用、へ、句、も、出、せ、且、是、て、
 及て主君を恨、む、けり、浩、然、一、個、の、近、習、が、次、の、間、より、我、來、て、大、江、親、兵、衛、召、す、と、參、上、
 聞、え、上、ま、政、元、則、徳、用、を、退、一、席、を、改、め、又、親、兵、衛、の、面、談、を、文、武、の、暗、譚、と、毎、の、如、く、既、不
 佳、息、入、り、折、政、元、の、又、の、幸、う、頃、日、東、山、殿、故、画、を、徴、さ、す、の、の、巨、勢、金、岡、が、画、虎、の
 一、軸、也、我、の、内、覽、を、請、ふ、者、也、其、傳、來、の、趣、を、寫、集、ら、ん、我、園、を、其、言、都、怪、談、の、
 過、さ、れ、信、容、ら、ん、和、郎、文、武、の、才、子、の、學、向、亦、博、識、の、聞、え、お、れ、問、て、疑、難、を、啓、せ、る、と、

思ふより今日亦見参を促し世俗を相傳へ昔巨勢金岡勅詔より画
 馬の夜出で芳宜なる胡枝花を畫ふは外圍も相似る怪談あり知ら
 ぬ我意ふ是等その画を神せんとて好事の筆の載るを奇を好む者も思へ
 傳へ故事の倣すの木石とて造り古佛諸菩薩の又あるも信らざる況や
 画像紙中の黑蹟面者背多背を畫け面を素是其身半體の者靈あり
 出るとの虚談ありんや。又思ふ別亦以ある事飲甚麼を問れて親兵
 衛然い未熟寡聞の人の知らぬ非常の奇事論をくもいねと問れ
 冥さる不敬のやいむ抑巨勢金岡の光孝天皇の末葉也姓紀氏諱圓深普
 天子と號し又朝日向闇梨といふ宇多天皇の仁和四年勅小依御子の障子の
 儒の像畫き或は金岡の從五位下米女正其三子相覽ん公思公相其小葉を
 兼佳聲有る金岡傳の如くは依佛の馬を畫きしは是も画聖なるを

小説の来り或は又故廟の繪馬が夜女の鬼をもち來せ走りきとの怪談の
 兔路今昔の菓子飲有と見へ故物の靈あるに至りて画像と木石銅像の差別
 ありは是を漢籍の考合し北齊の楊子華畫馬の身を動して
 長く鳴く奇異あり人相稱て画聖とまといふ又唐の太宗の時李王獻畫き
 羊の登則欄外に出る草を齧て夜則欄内小臥人其理を曉る者なり僧贊
 寧が曰此幻藥を以て画す南海の倭國は海に浮珠あり蚌波有り色小和
 物の着れば晝見して夜隱る沃魚山石磨も色小和物と添具又昼見して夜隱る怪
 物も足らばを記。這兩奇談國俗の金岡畫馬と目を同くして談るべし又唐の張
 僧繇が金陵の安樂寺に畫さける四箇の龍に敢其睛と點せば毎々是は點せ飛
 去ん人并を誕妄とて笑する者なり僧繇已をいふ其一點を須臾とて
 雲湧起り雷霆聲をもち破て其一龍雲を乘り天より失けりその眼は點せざる

三龍今猶見よ。那寺小在りしひ。是も亦金岡の画。と云虎の無瞳子。唱者。年を同じと談るべし。或は又顧長康。多く人物を画けり。都て其眼の點せど人評り。是を問へ即答て四解。妍唯本妙處。傳神寫照阿堵中。在りしひ。是等の張僧繇。その用心。同く。と実事と云る。不足ん。故の他の名画。唐の顧本。立及江都王。鄭度王。維王。墨。多數人の如き。皆傳神の至妙あり。杖擧る。不違あり。就中一大奇。元人南郎。輟耕録。卷第十一。温州監郡。某の一女の画像。新監郡。其の子と夫婦あり。及杜荀鶴。松窓雜記。載る。唐の進士顧頰。画美人。真々と媾合して。子を生せし。後画女。軟障。歸上りて。其画中の子を添たる。よをいり。文及け。具みせ。原文を照る。紛ふ。くもい。是等の理の。所。その事。の。詳。筆。載。遮。莫。盡。書。信。書。不。如。孟氏。の。但。世。人心。物。因。情。鍾。情。極。感。多。を。は。て。

三伏の夏の日の名画の雪山を觀。清凉と暑熱を忘。冬冬の霜の朝。名画の花鳥を觀。風春の心を生。近日ある人の狂歌。逢も。見も。人の恋。あき。浮世画卷の。と。詠。も。の。心。操。壁。只。道。去。画。地。獄。變。相。後。成。都。の。人。詣。來。て。觀。て。咸。罪。を。懼。れ。て。福。田。を。脩。猶。且。兩。市。の。屠。沽。其。肉。れ。爲。の。集。又。李。思。訓。が。大。同。殿。の。壁。画。雪。け。山。水。の。玄。宗。帝。夜。毎。々。水。聲。を。聞。く。と。あり。通。神。妙。の。稱。譽。あ。り。如。有。佳。れ。名。画。の。奇。特。を。い。る。必。無。と。云。又。必。有。と。云。ま。ま。の。故。孔。聖。怪。力。乱。神。を。語。ら。ざ。と。い。ふ。あ。る。一。お。愚。按。を。稟。す。の。虚。実。の。知。る。よ。い。を。と。答。る。詞。の。花。あり。実。ある。辨。論。委。ま。る。一。を。政。元。所。の。嘆。賞。を。適。愛。死。博。学。又。面。我。憶。を。一。議。の。り。て。よ。れ。学。問。を。致。し。好。々。都。て。あ。る。の。たり。見。世。の。事。遠。き。唐。山。の。故。実。の。左。ま。れ。右。ま。れ。明。日。の。我。故。畫。の。真。偽。を。試。て。邪。俗。説。を。破。ら。ま。く。欲。ま。開。後。の。を。知。ら。ず。け。大。誼。の。き。を。分。て。あ。の。日。の。暗。譚。果。然。

第四百十五面 虎眼小點して異風公文廳を鬧を

却説左京北政元の目大江親兵衛が暗譚果て退り後猛可の香西復六を召て
のまう衛の竹林異風とやらが内贖を請ふと聞え巨勢金岡が虎の画軸の一談の
就て我其異風の質問んと思ふよりありその所以箇様々々と意衷の趣を宣示
あて又のまう候は明日已牌時候の竹林異風を公文廳へ召よとせよ。あの餘の
事ハ候々有司の傳へて準備をせよと詞急迫し吟附れ復六あるは果ていそぎ
宿所へ退り候。馳て人を走らし。那骨董經紀ある祿齋屋余市を召し下
知の趣を言示し。時分を錯へて異風を召て参るべしと課まれ余市の既事
成りぬと思へ満面うち笑れ。言美志を退りける。介程有司門の復六は達
て各その下知を以て事の準備を做し程ふその日暮て。明の朝余市の辰牌左側

早く異風相俱して管領政元の郎の伺候し公文廳の局の外面在り等と約莫一
响許既のり。當廳の有司の毎皆出仕ぬれんと思ふ程は警固の走卒聲高き
四條某の町る經紀余市許歇宿せ。逆旅の画工竹林異風在るや疾参り候
まの異風余市同音の異風風よりあはれ在り美り候と答へ遽く身を起其件の走
卒這方とて局の内をまわらせける。當下異風先の杖をておそく。あの公文廳の光景を
見且余有司左右の羅列れて管領のいも出のむ。又有司等の後方。帷幕の裏面
火身甲ある力士三四十名のみ短槍鉤索を執るあり。并が頭人とながら西個の武士
一對の武器を整理し。又局の左右の警固の走卒三二十名各桿棒を衝立
四下の眼を配りて居り思の増える武備儼重なる威風凛面を向くもあはれ余市は
異風のいもそのあるをいぞ安危のふと店と思胸安んぐ。跪居り。姑且と政元香西
復六を先立一個の近習の大刀を執り屏風の背より出来て儲の高座の着く。

後方侍る一個の近習が那金岡の虎の画軸を背より出て、葎木載て主君の側小指さし
 けり。登時に有司を被て誰もある召人異風を疾参らせよと喚ひ、一個の青侍ある
 びて早く異風を吸升し縁頼みたて来りけり。異風の目の打拍申の時可多く銅色の
 尉斗目衣の鳥紋紗の十徳の肩衰て陳て赤小豆色の做らるる披り引れて躡く
 政の面前中を畏る。昨宵に怪可の敗衣店で買整へる公服の下衣をけし膚寒げゆく
 鳥羽画の筆意不似うける。是も一家の画風歎と思ふ青侍は笑ひを忍びてを儘推居退
 程一個の有司勝と杖ちて信と異風の向ひて竹林異風美れ替は内覽を願ひまうけ
 故画の筆を館みつら尋さむの言あり具の答稟走へ。こいれて異風頭を拍げて仰せ
 兼りひら那金岡の虎の寫真の事も家の口碑を書寫して憲覽備まりし如く
 相違あらずいふとまうは政元も聞てをれ異風衝つ進らせる那虎圖の傳來
 書の尚も眼の點まる立地の枝出人を傷ふ危映あらんといふ其要神小て價を貴く

せん鳥も下唐山も介る例あり。壁唐の本王献が画き羊の畫は出て草を齧む。夜の
 欄中の隱まう。是れ幻術ならず致す所の画の奇特ありあらばらしし僧賢寧が看破
 免有任れ我國俗相傳へる。昔者金岡の畫き馬の夜出て胡枝花を切斷はらんといふ誣妄
 件の羊を師ゆう又張僧繇が畫き龍の敢其眼の點まる人強て點まるれ其龍忽地枝
 出て雲の乘りて飛太然と那土寫る物のあれどもも亦幻術をして致す所の人を眩惑
 志てみらる画を神せし豈信の画る龍の理ありて介らんは是の思ひを金岡の
 亦みらる其画を神せし欲まる虎の眼の點まる時の人を思ひを介らん開け左まれ右
 あれ既の這虎圖を故筆鑒定者流示る小金岡の真蹟疑ひのまらしといふあらせて
 東山殿の御用の達たうあれども目子るけし一身不具也貴人の御物の做らる爾
 是繪師を然るあらるあらる目今這虎圖の兩眼小宜く點してまあらせよ
 とくといふせい兩個の近習杖を出て件の虎の画軸と准備の筆硯を俱令抗け躡く

異風が身邊に推着て疾仕れと促しけり。異風是困果ておそく稟をせし御説謹て羨
 なりひひ然る非如貴人御威徳の仰付きせむと或又富家の千金をりて誘ふも
 このひととあり。さうはさるるまてん。庭訓あり矧又師の異人の教もあまの
 這無瞳子の虎の眼必よ點まると做られ。庭訓あり矧又師の異人の教もあまの
 町守りければ今も違却はりかろ。御意不恃る畏れどもいそまの美を御許容ありて
 餘人は仰付くまを願ひせむと辭ふを政元冷笑ひてやをれ異風父祖の敬言師の教
 誨といひて證據もなき。孰も実事平て饒まへ今別人をりて眼の點してさき奇特見れ
 加筆凡画の所以るれと稟さん與の推辭多し。約莫術者の幻術をりて猛獸を見走時
 或の眞十獸を渡ぎ掛立立其術敗るる。我既の準備あり倘又実に出
 真虎の愛るをもよく力士を聚合其前より其裏の幕の内在れ。駈制する難くま
 開てを推辭い奇特を倡て上て欺きなる。其罪持の輕らむ。牢獄の敷きぎて懲さん
 然ても推辭飲點せむと緊しく責て饒さね。近習の毎左右の件の初軸をりて同

筆を添よと推着れ。有司等も共侶の異風をも遅滞せし。今その虎の眼の點してさき奇
 特見れども開の傳來の失れれば汝の罪ありさるべし。倘又実に出る開へ未曾有の珍事
 開も又御意不頼のさるれば及て御感の預む。但幻術をりて虎を出さる上を慢侮なる
 罪饒されさるべし。余術なる疾點せし。推辭稟去身の爲るる。後悔せむ及んやと
 論し薦む己され。異風平伏す。肚裏の左さる右さる思ふ。那神童の歳を破る危き所
 爲るれ。他果して神佛の化現ある。狐狸の变化する。那教も。又是実と做る足らぬ。後の出を
 怕まら。今の安危の靚面。只點するおそくさる。言守思を。頭を拾げて。御教諭感佩
 仕らぬ家訓及師匠の敬言戒れある。故に一具御説を辭ひせむ。今いも脱る路。活物の
 眼の點する。師匠も羨むといへ。左も右も仕らん。只その奇特の有無。素より家傳の頼る。めで
 試みる。御用捨せし願ひければ。父を硯を引よ。懐紙を出り。裏の那行童教
 られる。眼の點する。画法を甲乙と寫試る。十二生月と同く。是の毫も忘るべし。心

易しと思ひつ則件の画虎の雙眼の烏珠を點と點と出まを有司則受命とてそが倭主
 君の皇國を登時政元へ近習の命をその旁軸を廳の柱に掛させく。舟人共これと觀る小目
 子まろし時よも活る如き猛虎の勢ひ名筆疑ひまろし今其睛を點と點と勢ひ初十
 倍と毛骨竦立可るれ誰か感歎せざるは憶ご一霎時眷惚る。就中異風の神師の傳授
 失て我をからうとて思へ膝の杖も知らず鼻春蝨ちりて俱は觀る程は怪とて。那里
 と多く疾風颯と音来て掛す件の旁軸を吹翻し。翻其但見る白額斑毛の大蟲突然と
 ちて見まの来る勢ひ高峯を降ま如く走り蒐り。異風の呪を禺然と噬締て振一振
 其散と漬る鮮血共の噬断離らま。首は縁頬の輓隕。軀は仰ま小小まけり。前未聞
 る一大奇怪の孰辟易せざる。死主從齊一立噪ぐ。ち中木香西復六々聲耳慌く。ち
 兵毎出よと叫ま。帷幕の裏面おかえり力ま頭人種子嶋中太正告。紀内鬼平五景紀の
 須破也と俱は走り出で連り力まを薦めける。是より先景紀へ那身の横傷愈えれば前も

に驚りて礫を飛り力ま準備の糞汁と獸の鮮血賜まを。蹴ぐ者へ蹴掛け。短槍鉤索を標る
 士卒の駈止と欲まを。幻術の虎をまれば。穢物の破れま。又胎生獸まを。投石器械鉤
 索まを。及ぶ死叫まを。逆者へ噬小まを。避んとするは。跌滾して。折き脚を折き腰を折き。命を
 喪ふ出沒迅速進退猛悪中まを。もむ。復六並有司まを。近習青侍と共侶の主君と
 守護へ退きて。齊く屏風の陰に在り。又局の左右に排列する。警言固の走卒敬馬噪まを。持る
 棒も。甲斐まを。送る人を指まを。咸一團おれまを。況局の隅に土坐る。骨董經紀祿齋
 屋余市の事の異変お胆を淡して。一霎時も。堪まを。外面出入と欲まを。出まを。失ひ。跌倒れて
 一聲苦と叫び。果まを。儘氣絶まを。うけ。介程お虎の連り。の哮狂ひて。幾層の人を傷りけん
 衝と走出る時。異風の首を樹て。葛真お又警言固の走卒を。駈倒し。蹂躪して。身を跳や。高
 堀を閃り。踏るを見る程は。往方へ。知まを。うけ。這時力まの頭人。種子嶋中太正。鬼平五
 辛く命を免れまを。力ま。過半傷られて。半死半生まを。うけ。虎を逐ふ。死擬勢まを。



十九



虎は
 不畫
 巽
 風喪元

又只力士們のさる有司の傷見あり。走卒も亦幾名死或は虎に傷られ或は又蹂躪ら
 きて血塗れらるも、刻々有侍り。程政之猛虎のあざむき見えて、摩生る心地り。
 側は復たふち向て却未曾有の珍事ある。那虎那里おれは、尚又多人を傷ぶ
 開又公私の憂ひを、又中太鬼平五等のお餘も武勇の者も課て弓箭鍊銃小煨煉
 する。殿兵各二百名を従せ、八方へ部七とて、虎を獵捉せよ。意ふ高きせよ。越我
 邸内は在らざるべし。洛内市中は横行其我失と人皆いふ。おのそ先急べ。次は瘦ひる
 士卒等宜く勸り宿所へ還して療養を、用はせざるべし。宣定近習を従て、鮎與ぞ
 入りける。現興おれ、意氣揚々と、眞盡な、宵臆愾々奇行ある者、必奇禍あり。又鬼
 神を侮れば、竟小鬼責る。たを、政元異風同轍、其妖孽の齊く、な、猶幸と
 する。間話休題、介程の香西復六とて、や件の下知を傳へて、正告景景紀を、存遣
 又恙るは有司、別士卒を召聚へ、死人と傷瘡見せ出さる。事の紛乱あり。

つらもあま、その中、祿齋屋余市へ氣絶せの、身を傷られ、姑且と我復りて、杖小
 携り、辛く七宿所へ居るを、泣れ、天驚心も破りけり。宵より又發熱し、四五日
 起り、泣きけり。然又種子嶋中大正告、紀内鬼平五景紀、猛可、殿兵數十名を従へ、
 箭鍊銃の準備足さざる。先邸中を、も、巡りて、件を虎を、索る、就里おれ、知る者
 あま、是より又虎獵の頭人を加え、各列を、ま、わ、て、四方に分ち、立出、洛内洛外
 隈も、夜、日、も、さ、淋、れ、其、影、も、さ、ま、ま、去、向、の、地方の民、向へ、も
 見、さ、の、者、あ、ま、候、而、も、の、次、の、日、の、已、牌、時、候、の、種子嶋正告、二隊の士卒、洛外東の申
 明亭を、過、程、人、居、又、在、在、何、を、え、瞻、仰、る、り、正告、を、誣、り、て、殿兵、其、衆、を
 拂、は、せ、立、上、り、是、を、觀、る、小、島、木、又、一、多、い、お、き、男子の生首、一級、梟首、姐、載、あり
 晴、と、定、も、猶、熟、視、る、不、怪、き、哉、此、是、昨、日、那、虎、が、銜、去、り、け、竹林、異、風、の、首、級、を、
 什麼、と、た、り、ふ、ち、驚、馬、れ、て、在、り、け、程、鄙、備、る、一、個、の、行、客、あり、俱、站、ま、の、首、級、を、
 八代傳九卷二十一

側多人の告るやう己の丹波の素田なる某師院の村民でいふの鳥取れりる罪人の我村
 る繪額經紀箕利屋異と吸做る奸悪人といひき余る那奴這秋の時候箇様
 箇様の情申あつて友を殺し妻を誣て伴誑の賄簡を御借さ刺す友の錢財衣裳を
 奪略りて夜の紛きて亡命あけむ隨即領事仰せりて久く往方を索ねりる竟ふ
 知るより果して天罰免れどして憚る死状を做る那故の箇様々々異於學す
 不義の顛末始に長門より流寓来て九里平の迹を継ぎりる他們が半表半裏の
 年来の行状並に樵夫樵ある且奇き行童ある又金岡の虎の都て他們が奸
 虐の秘支の村民是を知らざりし住日於鬼子の冤魂を市平の強め向せし隠原
 竟の發覚れと云其大略を解し其聽卒存一駭歎して不思議の事と思ひける然
 種子嶋正告も料む件の一奇談を聞いて既便宜を述べ公まゝなる行状を喚林茶も
 うち向ひて目今雨が不問語めて這竹林異風の来歴を聞知る酒家の西陣の管領の

御内人種子嶋中太正告是又原來這異風丹波の素田の多人より秋昨日那奴が走
 る金岡の虎の怪虎の往方を索ねて捉鎮れよとある君侯の仰より我黨五六隊四
 部して涉獵れども虎の往方を知りよとて及て虎の銜去られ異風の首級をの料
 ざる今あはれ見ぬ多の亦是奇中の一奇事ゆゑ実天罰をらんか那異風が横死をける金
 岡の虎の眼の點せ異変ありたりその故の箇様々々その崖略を解して有佐れ雨を
 召俱して邸に還りて異風の来歴を聞する君侯の御疑ひ立地は氷解せん酒家の後
 たるべしこれで行客頭を搔て開亦思ひける事多漫水は暗きより連累せら
 る事何いせんを鏡さむるか勧解を正告聞あむ何て不承事あるをやとよく立ねと
 いさして野兵の下知して行客を守らりし従ひて航てあより又引返して西陣へいそげける是れ
 衆人の那画虎の怪談と異風が奸悪を憶も聞知りて且敬馬さ且怪と共口順小做去ら
 まの支又日るむ四方の聞えて駭怕さるるるりけり介程種子嶋正告那行客を捉て西陣



八代傳七郎卷二十一

三十三

○天竺堂



八代傳七郎卷二十一

○天竺堂

多。郊。う。行程。不。謀。ら。る。暇。兵。両。名。の。左。右。の。立。て。由。漸。多。う。怪。び。下。行。客。の。檢。査。せ。ら。れ。見。
 え。ら。る。け。り。暇。兵。も。是。の。胸。を。凌。七。吐。嗟。と。叫。び。正。告。も。驚。き。て。俱。不。見。え。る。現。行。客。の。
 在。ら。る。多。う。の。原。來。那。奴。も。変。化。多。う。一。飲。不。思。議。々。々。と。む。ろ。不。呆。れ。て。二。三。時。去。り。余。は。
 却。已。に。死。ぬ。あ。ら。ざ。れ。ば。只。得。西。陣。の。う。へ。來。て。隨。即。主。君。政。元。の。件。の。事。の。趣。を。具。し。聞。え。上。り。
 政。元。も。亦。訝。り。て。然。ら。ず。丹。波。の。某。師。院。村。へ。早。く。謀。使。を。遣。し。異。風。來。麻。止。素。生。を。質。
 問。さ。る。不。如。と。さ。る。と。猛。可。の。兩。個。の。走。卒。の。吟。呻。て。件。の。村。遣。せ。不。毫。も。想。へ。ない。
 才。の。三。日。許。の。程。不。間。諜。使。等。の。來。て。僕。等。某。師。院。の。村。民。の。尋。問。け。り。異。風。於。兔。子。
 樵。六。の。事。の。顛。末。の。固。様。々。々。の。言。言。當。那。行。客。の。不。同。語。の。會。合。け。れ。ば。政。元。憶。を。
 歎。息。を。て。介。ら。ず。事。の。実。を。那。行。客。の。非。け。り。神。佛。の。化。現。歎。と。思。難。く。思。ふ。も。疑。い。な。
 鮮。け。り。有。任。り。程。の。紀。内。景。紀。們。五。六。名。虎。獵。の。頭。人。各。列。卒。徒。て。も。空。く。七。か。り。
 來。り。主。君。の。聞。え。上。る。事。臣。等。の。三。四。日。洛。内。洛。外。三。里。四。方。を。隈。も。く。ら。ち。巡。り。那。

虎。と。索。ね。い。ひ。の。地。其。地。の。民。亦。見。ま。る。者。の。多。く。攻。據。も。る。い。の。這。義。と。稟。上。ん。と。
 退。り。い。の。政。元。これ。を。ち。聞。て。然。も。そ。の。自。正。告。の。隊。不。信。奇。事。あり。意。ふ。那。
 虎。出。暴。れ。折。外。面。去。き。見。し。幻。の。故。の。弱。軸。か。り。入。り。ん。ち。閉。き。て。疾。見。よ。
 則。近。習。不。吟。呻。那。画。軸。を。出。せ。見。る。尚。素。絹。の。虎。の。一。條。は。是。抜。出。し。い。ま。絹。
 へ。か。ら。ま。る。他。尚。遠。く。去。ら。る。と。思。へ。胸。猶。休。ま。ず。一。日。二。日。と。過。さ。程。洛。中。猛。可。の。風。聲。
 あり。昨。宵。白。川。山。に。虎。の。趕。り。者。あり。其。甲。辛。く。逃。て。才。の。命。を。免。れ。某。の。咬。れ。り。と。い。
 の。虚。実。分。明。さ。る。う。の。次。の。日。白。川。の。山。里。の。村。長。並。石。匠。等。詰。來。て。訴。稟。さ。る。
 さ。ま。の。と。聞。え。一。那。奇。き。唐。獸。の。我。山。中。の。躰。在。り。書。山。を。踰。る。者。一。路。見。察。さ。し。那。
 虎。の。撞。見。て。命。を。喪。ふ。者。これ。あり。夫。の。故。本。村。の。男。女。駭。怕。甚。甚。者。の。隊。を。定。めて。虎。を。防。ぐ。
 准。備。不。他。事。る。宿。所。の。火。口。を。閉。て。活。業。せ。し。め。飢。餓。不。及。ん。と。早。く。獨。戸。の。仰。付。き。せ。
 虎。害。を。除。せ。ぬ。と。連。署。の。願。書。を。と。り。管。の。請。稟。さ。る。政。元。い。よ。驚。憂。の。近。來。

對治せらるべし。其村民を宿所へ還らし。其後又香西復六と有司們を聚合志。連
 了衆議を擬せども。大家計の出来る所。先洛外より。獺戸の課て。虎を退治志
 志と。多く。獺戸を召聚て。募る小賞錢を重く。まきども。獺戸等。悦び。皆辭ひ
 稟せり。非如猛獸。多うとも。能欲狼。のい。較。捉。く。い。とも。他。熊。狼。より。猛。こと
 十倍。唐。山。の。惡。獸。也。且。肉。身。の。者。多。き。故。名。画。小。天。あり。技。出。る。の。い。り。箭。鏃
 砲。の。よ。く。及。ぶ。く。も。い。む。其。美。饒。守。の。い。な。異。同。様。不。決。り。と。有。司。等。聽。き。頭。を。掉。て
 若。們。國。恩。を。載。り。て。安。く。宅。眷。を。養。ひ。か。侍。も。時。御。用。の。達。志。感。活。業。を。召。放。ち。地。を
 追。放。せ。り。べ。然。る。も。御。談。不。從。へ。ま。り。と。眼。を。瞑。ら。り。て。權。本。一。六。獺。戸。等。の。困。果。て。只
 得。言。兼。し。て。退。り。ける。中。小。血。氣。社。中。名。聞。と。好。或。の。賞。錢。の。具。ま。利。と。し。く
 命。を。た。り。く。者。毎。敢。那。虎。を。怕。ま。し。て。の。ま。他。の。原。是。故。る。画。の。妖。さ。る。ま。火。を
 と。焼。ん。各。俱。大。銃。と。火。某。を。多。く。准。備。し。て。獺。一。獺。て。試。ま。し。連。り。不。薦。也。已。り

け。は。大。家。に。れ。小。將。大。ま。ま。然。と。左。せ。右。せ。んと。隊。を。立。暗。號。を。定。め。各。火。某。腰。餉。の。准。備
 多。鑊。砲。竹。槍。列。卒。繩。を。携。り。て。白。川。山。攀。登。り。件。の。虎。を。涉。獵。り。一。晝。夜。不。及。公
 まで。虎。不。遇。さ。る。隊。も。あり。或。は。虎。と。見。出。て。連。り。不。鑊。砲。を。放。懸。れ。ど。虎。は。これ。を。物。と。ま。せ。ど
 縦。横。無。算。不。走。り。蒐。り。て。其。獺。戸。等。を。噬。倒。を。勢。ひ。中。る。べ。う。も。あ。ら。ざ。れ。ば。准。備。悉。相。違
 まで。矢。場。不。命。を。喪。ふ。者。あり。幸。ひ。し。て。死。ぎ。り。も。多。く。傷。ら。れ。脚。を。折。せ。て。半。生。半。死。を。り
 ぬ。も。き。け。れ。い。ま。虎。不。遇。さ。る。獺。戸。等。も。怕。ま。し。て。久。く。休。め。ど。大。家。山。を。逃。下。り。て。巴。提。便
 姓。氏。の。短。劍。馮。婦。博。者。一。卷。不。傲。ん。と。欲。さ。る。者。も。一。ま。の。故。其。隊。毎。故。老。們。俱
 政。元。の。郎。不。諳。て。事。任。々。と。想。て。復。催。促。不。從。へ。ま。り。風。聲。置。々。と。那。虎。昨。宵。ハ
 林。麓。下。り。て。聖。護。院。の。木。林。不。在。り。明日。日。枝。の。山。遷。ん。欽。東。山。の。御。所。の。頭。も。心。許。る。一
 倘。亦。那。虎。智。甚。河。を。ち。渡。し。て。洛。中。を。横。行。其。禁。裡。御。所。棋。家。宮。方。花。の。御。所。と
 稟。ま。し。も。防。禦。易。う。ら。る。馬。噪。ぐ。程。小。寺。院。の。尼。姑。及。坊。間。の。婦。幼。們。今。も。虎。の

出来り如く戦慄して昏るも門戸を閉て潜居り然ぞ神祇伯陽家へ悪獸對治良賤
鮮厄の祈禱あり又叡山中三塔の大衆詮議して武で嗜む暴法師へ鐵を磨き武具を
準備して虎倘入らば射て捉んとす柄膏引て瘡あり然らぬ猛虎調伏の讀經暇も
ける修法は亦只是のまゝ浴内浴外の寺社を爲す皆丹精を抽く祈らざるべからぬの
法驗感応いも聞えむ故の管領島山政長は將軍家議尚の仰より二百許の士
卒を領て東山殿を守護せり其在京の武士は課て内裡並花の御所
を守護せらるる且管領政元の妖虎の由来を尋ねぬて早く對治の計議を旋りしその
器は勝る勇士を擇み孽を鎮め民を相て上下安堵の大功を聖に奏せむ辰襟標を
へらば聞くこの妖孽は京兆政元奇を好る遊戯より事起りてあふ至る尙對治
遅滞其身の爲宜耳かづと緊く責まざるべし政元痛く畏りて且羞且集燥で
ありやう始骨董經紀余市奴が刑餘の多人異風を汲引て那畜軸の内覽を請ふ

あそ。這妖孽の起り有は是れは是の罪の則異風と余市奴在りて中の異風の積不
善の天誅予がを候て風く首級を梟られ先や余市を罪として召捕せ首を加て其
人口を塞ぎ我上後安らんと尋思とあり有司の命にて猛可余市を召捕て罪を以て
倡て斬首の刑を行ひけり現苛政の虎より酷いものなる古人の格言思ふべし然ぞ這録齋
屋余市も亦是好人のむすぶの時の方て東山殿奢侈を次ふして茶器奇石故書画の
類都てはご死貨をのみ弄び多ふよと骨董と宗と其經紀見は母の利を射るを勤る
就中這余市の政元の親けは東山殿の求むる東西といへ人の譲らば并て政元の
も小就て那方ざる進むるは是用ひらる現小錢を棄ざれば大錢は自然の勢以余市の
勉て那家の權幸する香西復六の餘の有司の時々人情を厚くして上下の資助を治
まじとあそり其利火計の經紀見は十倍まれば尚飽て出所不正の東西と知り買
も賣もそれと資助宜けむ其崇はあそ漸々小家優て奴婢をある高上までの

和漢新故の珍異珍物ヲ積れ庫在り。盈れ虧る天理を知らぬ。衛兵出所詳る。公異風を
 家の留て利を欲する。故画崇て病着あり。病着愈て起出。日小那身の召捕られ。首を度以家
 庫財宝没官せ。宅着へ追放せられ。然けども。人小預け。餘財系三百金のけれ。余市
 獨子某て。是を抱死て母共。近江を走ると。名を變て小社の神主小做り。子孫才小相續あり。
 此は是後の話。現汝出で。汝返る善惡。忠報の理り。只這經紀の。まど始那虎の暴中折或
 命を喪ひ。或は残江蒙りける。有司力主走卒。其後又百川山。那虎小傷られ。行客士良。獨り有
 皆是殘忍貪婪。不孝不義の毎也。好人一個も。且善人。那山を夜々越。是も虎小撞見。有
 恠れ。是靈獸之世の民の父母者。きく仁政を行ひ。多征せ。と那虎小出。走ると。人識者
 批評。御中。政元。其言を迂遠。とて敢用ひ。及て身の非。飾んと。人屠る。と承の像。經紀余
 市。誅戮をける。後の話。説甚麼。を。并ハ卷を改めて。是より又下の回。解分る。と聽ねか。

南總里見八代傳第九輯卷二十七終

